

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

樋口和彦・滝口俊子著

『生命科学』とキリスト教 4

からだ・こころ』

（五月）日本基督教団出版局・発行一九八八年
A5判・一一七頁 七五〇円

「からだ・こころ」と題された本書は、聞き手滝口俊子教授によって問われるままに、樋口和彦教授が日ごろ考えておられる、広範囲に及ぶテーマについて対談したものをもとにしてできた本である。目次をみると、受苦性や苦難や礼拝の意味などキリスト教と関係がありそうな題名とナナムの関係や女性の解放や子どもなどキリスト教とは関係のなさそうな題名が並んでい

る。しかし、これらは皆、キリスト教とながっており、それを、樋口教授がわかり易く語っている。答えを出すというよりも、読者がさらに考えていくよう刺激している感じである。

キリスト教とつながっていると書いたのは、ユング派分析家としての心理臨床家樋口教授と接している筆者は、日頃、「樋口先生は牧師だったなあ」と自問しなければならぬほど、牧師の香いを感じなかつたからである。ところが、本書では、キリスト教の教えをこなし、その視点からあらゆる事象を把握している牧師樋口和彦像が筆者には新鮮に、浮びあがってくる。

本書には、キリスト教徒であろうがなからうが、今、人間として問題にしななければならない、皆が悩んでいる切実なテーマが語られている。例えば、女性の生き方に関しては、女性は「…絶えず、精神を発達させていきながら、またいつでも、月経、出産など身体性まで帰ってくる」ということが女性の利点である」と述べ、さらに、「人間の根元みたいなのを持っていて、自分のからだを確かめて、又、出発していく

ことができる」という。男女同権を主張するのも大切だが、女性は、この利点を忘れてほしいと訴えているように思う。人間の生き方に関しては、近代化、物質文明にとられず、自然から離れることなく、動物性を意識することの大切さを主張している。さらに、人間の住む町、社会は、機能的にうまくいくことだけではなく、いろんな世代の人が住み、善人も悪人もいろいろな人がいるところだろうという。単位を小さくした家庭は、「ぬくもり」がなければならぬと言う。ぬくもりは、「トロトロ温める熱であり、マイルドな熱、暖かさ、うるおいを意味し」女性、母によってもたらされることが多いと述べている。など、

このように本書は、多種多様なテーマが、わずか一一七ページの中に、わかりやすく、コンパクトに述べられており、悩める人、その援助者、キリスト教徒など、幅広く読んでもらいたい書物である。

岡田康伸（京都大学教育学部助教授）

土橋寛編・広川勝美編集

『古代文学の様式と機能』

桜楓社・発行一九八八年四月

(A5判・二〇七頁 三、四〇〇円)

本書は、名誉教授土橋寛博士が傘寿の慶賀を迎えられたことをお祝いするために編まれた論文集である。その契機は、一九八五年六月に同志社大学を会場として、日本文学協会の研究発表大会が開催された時、古代部門のテーマ「古代文学における伝承と様式」について討議がおこなわれ、席上、土橋先生は情熱的に議論された。これに加わった研究者を中心に「新しい視座に基く研究の方法を切り拓く」ことを意図した出版計画が練られ、めでたく上梓されたのである。

文学の研究は、ことばによって表現されたものを対象とする。これは自明のことであるが、「なぜ表現を問題とするのか。」が問われることになる。すなわち、「表現を成り立たせ、表現を促し、動かす力が何なのかである。その上で、様式の具体的な生態としての機能に注目する必要がある。ここに『様式と機能』という視座が成り立

つ。(まえがき―廣川勝美) ことになる。

本書の構成は、巻頭に土橋先生の「神話の様式と形と機能―大物主神と事代主神の神婚説話をめぐって―」、結びに廣川勝美氏の「神話のコスモロジーテクストの様式―」を配して、神話の様式と機能論を展開する。次に神野志隆光氏の「和歌様式の確立―ひとつの覚書として―」、身崎壽氏の「和歌と散文―記載の宿命、あるいは様式の成立―」、駒木敏氏の「言語の呪性と様式―問答歌話の事例に即して―」の三篇を並べる。これらの論は、歌の様式をめぐる問題を取り上げて追究する。次に三浦佑之氏の「様式としての語り―『室寿き』の呪詞から―」、古橋信孝氏の「文学の発生と様式の発生」、宮地正司氏の「ヒトコトヌシ伝承の位相―古代天皇制のテクストと様式―」の三篇を配列する。ここでは呪詞の構造と表現の様式性、文学の発生と様式、ヒトコトヌシ伝承の様式などを論じる。次に赤坂憲雄氏の「標の税―杖と境界のアルケオロジー―」、李均洋氏の「天衣と鳥羽―中・日における羽衣説話の比較―」の二篇を並べ、杖と境界、羽衣説話の中・

日の差異などについて論及する。次に高橋文二氏の「王朝文学の虚構意識―文化・様式の奥にあるもの―」、廣田収氏の『源氏物語』における様式としての垣間見』の二篇を配する。高橋氏は、「様式」とはなにかを問う時、その「視点は無数にあり、自分の今の問題の所在をよく確認しておかなければならない」と指摘し、「様式」を超えるものを予測する。

今日、文学研究の世界においてもさまざまな方法論が提起されており、自らの研究方法を点検することが要請されている。その点、本書に所収の論文は、文学の「様式」に関する課題を正面から取り上げ、「新しい視座」から分析がなされていると思う。

宮岡 薫 (甲南大学文学部教授)

池上洵一・藤本徳明編

『説話文学の世界』

(世界思想社・発行一九八七年十一月)
(B6判・二三三頁 一、九〇〇円)

今日でこそ説話文学は文学史上に所与のジャンルとして当然のように配置されているが、そもそも研究対象となつたのは、そ

んなに古いことではない。少くとも伝統的文学観に基く明治・大正期の文学史では顧られず、説話集の中で質量ともに群を抜く『今昔物語集』でさえ、昭和二年に芥川龍之介が「今昔物語に就いて」という一文で「生まなましき」を「芸術的生命」とし、「野生の美しさ」を認めたのが積極的評価のはじまりであった。王朝の雅に対して、王朝から疎外された者や庶民の、あからさまな俗と奇異が説話の世界だったのである。

多かれ少なかれどのジャンルにもあてはまることだが、とりわけ説話文学は研究主体の文学観を反映する。というのは右の経緯に加えて説話は伝承（口承）によって集団で形成され、やがて識字層が説話集に筆録・編纂していくという流動的で柔軟な成立過程をもつ文学であり、個人の作家の孤獨な文筆によって成立する、いわゆる近代の文学観とも異質だからである。伝承（口承）と筆録の間の連続と非連続は、それが享受される環境への論及をも含めて、文学的価値を根底から問うであろう。何が一体文学であるのか。説話文学とは、そのよう

にもラジカルなジャンルである。本書は序章総説（『説話文学』を考える（池上洵一・神戸大学教授）で、まず上述のような説話・説話集・説話文学をめぐる基本的かつ根本的な課題が明示され、さらに近世・近代を含むという「斬新な試み」の「自負」が述べられる。さもあれ各一章を割くのは類例がなく、自ずからこの試みは説話文学とは何か、の回答たり得てもいよう。すなわち「行きつまった個性の限界を突き破る」機能をもつものとして。第二章上代―上代説話の結集（寺川真知夫・本学女子大学教授）では記・紀・風土記・社寺縁起より説話的伝承とみなせるものを挙げ、『日本霊異記』が最初の説話集として成立するまでを概観した上で、『霊異記』を仏教の影響下にある説話群を自覚的に吸収したと位置付けた。第二章古代Ⅰ―説話文学の開花（池上）は、『三宝絵』『宇治大納言物語』『古本説話集』『世継物語』を扱って、かつての益田勝美『説話文学と絵巻』（昭和三年）を大きく前進させている。第三章古代Ⅱ―説話の宇宙誌『今昔物語集』（森正人・熊本大学助教授）は、『今昔』を説話・

表現・編纂の局面を通じて古代末期貴族社会の危機意識の所産であり、時代の転換期にあって外なる新たな世界に触発されて「言語をもつて世界の全体を記述しようとした」として、未知の世界に負うことよって完成をめざす説話集が、まさにそのことの故に未完に終らざるを得ない、パラドキシカルな構造を明らかにしている。以上、第四章中世Ⅰ―説話文学の黄金時代（藤本徳明・本学女子大学教授）、第五章中世Ⅱ―中世近江の眺望（西村聡・金沢大学助教授）、第六章近世―近世説話文学の誕生（井上敏幸・福岡女子大学教授）、第七章近代―説話モチーフの潜勢力（藤本）まで独自の論が展開されるが、西村氏の歴史地理的にみた近江文化圏は地を得た説話がリアルに蘇って説得力があり、井上氏の近世孝行説話と『古今大著聞集』説話の蒐集と受容への鋭い言及は「事実へのこだわり」を指摘して、近世文芸全てにわたって示唆的である。さらに画期的な藤本氏の近代には、巖谷小波からSF・コミックに至るすさまじいまでの作品の博搜によって、改めてその「潜勢力」の大きさを実感させ

られる。このように通史としての啓蒙性にも配慮しながら、各章毎に問題意識の鮮明な本書は、この分野の入門書としては勿論のこと、学際的な関心にも応え得る好著である。出来れば絵巻についても最近の動向に鑑みた指針がほしかったが、これは私の欲であらう。妄言多謝。

廣瀬千紗子（女子大学助教）

J・C・ブラウン著

永井三明・松本典昭・松本 香訳

『ルネサンス修道女物語——聖と性のミクロストリア——』

（ミネルヴァ書房・発行一九八八年七月）
（A5判・二六〇頁 二、四〇〇円）

女性の特有の感性の達した恍惚状態の究極の高みにおいては、それが宗教的なものか、性的なものかの判別はもととむずかしいものかもしれない——このことは、本書の表紙を飾るベルリーニの有名な彫刻「聖女テレジアの法悦」における聖女の宗教的とも性的ともとれる表情において、すでに象徴的に示されている気がする。

問題は歴史状況なのだ。女性の感性について、それが聖か性かを決定したのは、本

書においてその時代の宗教的状況と宗教権力であったのだ——この歴史的妙味が本書の核心の一つである。

本書の扱う修道女ベネデッタ・カルリーニ（一五九〇——一六六一）は、気質的に「幻視」の傾向が強く、彼女の語るところによると、幻視体験の中でキリストと語りあい、キリストと婚禮の儀を行い、心臓を交換しあったという。この供述は、聖女の誕生を歓迎する修道院長や聖堂参事会長らの地域的レベルの第一回の審問においては、正統的なキリスト教的な霊体験として承認された。しかし反宗教改革期のローマ教皇の息のかかった高いレベルでの第二回目の審問においては、悪魔の仕業として断罪されてしまう——彼女は投獄され、そのまま三十五年間の獄中生活を送り獄死していく。

審問上ポイントになったのは、幻視体験をしているベネデッタに付き添った同室の修道女の証言であった。彼女は、第一回目の審問でベネデッタの体に「聖痕」を認め、彼女を聖女に認定するのに貢献したのに、第二回目では、自分は同性愛を強制さ

れたと証言する。この一転した証言の背後の一つには、決定的にローマ教会の厳格な圧力が作用しているのだ。実に、すさまじい幻視の最中に、もだえ苦しむベネデッタの体をさすってやる行為がそれ自体は、聖とも性ともいわずれにもとれるのであり、時の宗教権力はある事情から後者をとったのである。

ベネデッタをして聖女から性的女性へと転落せしめたある事情とは何か。それは、トレント公会議で方向づけられて、決然として反宗教改革運動を展開していたローマ教会の宗教事情であった。その運動のバックボーンは、司教を中心とした堅実な日常的司牧活動と、異端（的）に対してきわめて過敏な肅清運動であった。手ごわいプロテスタントを前に、もはや聖女崇拜とか奇跡とか予言の力で安易に一時的に民衆を引きつける時代ではなかったのだ。ベネデッタは生まれてくるのが遅すぎたのかもしれない。

本書の原題は、そのまま訳せば『不謹慎な行為——ルネサンス・イタリアのあるレスピアン修道女の生涯——』であり、そこ

にややセンセーショナルな着色が感じられる。著者はレスビアン行為について、読者も（恐らく訳者も）恐縮するほど立入って分析・描写する。それは著者が偶然発見した稀有な性的裁判記録（本書はそれに基づいている）を我々現代人に価値的に訴えたいという欲求によるのだろうが、本質的に見て、教会からの圧力の結果としてレスビアン行為に焦点が移された経過（ことによると偽証）からして、そのまま「ルネサンス」（この時代用語も変だ）の修道女の純粋な性風俗の史料として問題提起できるかやや疑問が残るところである。

石坂尚武（大学文学部嘱託講師）

望田幸男著

『ふたつの近代——ドイツと』

日本はどう違うか』

（朝日新聞社『朝日選書』発行一九八八年十二月 B6判・二三八頁 九〇〇円）

かつて一九七〇年に、著者は『比較近代史の論理 日本とドイツ』（ミネルヴァ書房）という名著を著わし、比較史の方法を論じた事がある。ここでは、当時まだかなりの影響力を持っていた講座派・労農派・大塚

史学などの比較史の方法が大胆に論駁された。そして政治的精神的風土の差異や時代の差異を無視して、一方に「理想型」を置いてそれに対して近似値を図るという方法が批判され、その上で、日独近代の共通の論理が設定され、動態的な政治史把握のための比較史の方法が提示された。当時私はまだ大学院の学生であったが、大きく影響を受けたものである。あれから一九九〇年。当時の著者の指摘は、大枠の点において現在ではほぼ常識の位置を獲得した、と私は思う。その後、著者は、イギリス社会史とイギリス現代マルクス主義（文化的マルクス主義）を背景とするブラックボーンとイリーの共著を『現代歴史叙述の神話』と題して翻訳し（一九八三年、晃洋書房）、比較の方法として「近代イギリス典型論」批判および「ブルジョアジー—自由主義—民主主義」等置論批判を紹介している。その内容は、本書第四章第三節に詳しい。

や戦前の体質の問題を論じたものである。現在の地点とは何か。日本が、学問的にも、政治的・社会的にもヨーロッパの後進国と考えられてきた時代が去り、「日本アイデンティティ」論、中曽根流「日本学」など「上」からのナショナリズムが鼓吹される時代状況である。

第一章「歴史における国境の条件」は、日独近代の国境の条件が比較され、そこから日独近代化における変革形態の相違に説き及んだものであり、第二章「ドイツ帝国と大日本帝国」は日独ファシズムの比較論である。第一章は、ドイツと異なり、なぜ日本では、国境の人為性、ひいては国家の人為性が意識されにくいのか、ひいては日本とドイツの近代の置かれた条件がいかに違うかが改めて考えさせられる。第二章では、日本ファシズムの特質の解明の方法として単にナチズムと比較するだけではなく、第一次大戦下のドイツで成立したルーデンドルフ独裁をも加えて両面からの照射によって比較すべきことが積極的に提示される。著者には、比較対象を厳密に選定することに於いて、ファシズム理解の混乱や、

はては日本ファシズム不在論までが登場する状況を打開しようとする意図がある。

ところで、何のために比較するのか、またなぜヨーロッパ史を学ぶのか。その問題意識は、この本全体に貫かれているが、そのことを明確に論じたのが第三章「現在に生きる過去」、第四章「なんのためにヨーロッパ史を学ぶか」である。著者は、ヨーロッパ史を学ぶ際にも、自国史とその今日の現実という大地から離れてはならず、西ドイツでも日本でも「過去」について論争されるのは、現在をどう考え、未来をどう展望するかということに深く関わるからだ、という。この姿勢は、西ドイツにおけるナチス戦犯永久追及問題、ワルトハイム問題などの分析に如実に現われる。著者は、西ドイツの「戦う民主主義」という体制の論理を紹介し、ナチス戦犯永久追及問題で西ドイツを実際よりも美化することに對して警告する。しかし一方、西ドイツには「ナチス戦犯の永久追及」という全体的な一定の国民的合意のもとにある「テーゼ」が存在するのに對し、日本には「過去」にたいして「判決」を下した一定の国

民的合意を伴う「テーゼ」は存在しない、と指摘する。つまり日本において、「過去」は「未決」のまま「現在」に生きている。

この指摘を最近の天皇死去をめぐる事象に重ねあわせて考えるのは決して私一人だけではあるまい。

総じて、本書は比較史の形をとった著者の過去と現在と未来との対話であり、学問論としても究めて示唆に富む。

高久嶺之介（文学人文科学研究所教授）
川島秀一著

『カント批判倫理学——その発

展史的・体系的研究』

（見洋書房・発行一九八八年七月
A5判・四六三頁 四、八〇〇円）

川島教授の名著『カント批判倫理学——その発展史的・体系的研究』の特徴は大きく三点に分けられます。その第一は、副題に「発展的研究」とあるように川島教授が、デカルトやライブニッツの合理論の思想やイギリスのヒュームに代表される経験論の思想などと対決し、両者の調停を試みていた頃の批判期以前のカントの全論文の研究を通して、いかなる思想的経緯を経てカント

の中で批判的倫理学への道が用意されて行ったかを、克明に明らかにした点であります。このように、カントの卒業論文から始めて四十六歳時の教授就任論文までの、『純粹理性批判』に先立つ全著作を通してカント倫理学を考察するという研究は、勿論我国では初めてのものであり、世界でも類を見ないものであると解します。

さらに川島教授は、『純粹理性批判』においてカントが同一の対象を経験的な「現象」と我々に不可知な「物自体」として考察するという「二重の視点」に立つことによって、カント独自の、経験的實在論と結合する超越論的觀念論の思想を確立したのであり、その結果、カントによって、哲学は実体論的対象的な思考法から解放されて、本来あるべきはずの「経験という平野に働く、有限な人間理性の理論的実践的な自覚の形而上学」たることが出来たと解しています。そしてこの観点から、カントの全哲学体系は解されるべきだと主張されるのであります。これは川島教授の手になる新しいカント像の誕生であると確信いたします。

第三点は、副題の「体系的の研究」に当る部分であります。ここで教授は、カント倫理学が、いかに純粹実質的、内容豊かな倫理学であるかを、カント倫理学の根本概念である「道徳法則と自由」を正面に据えて明らかにします。そのことを論証づけるために川島教授が一番苦勞し、そして獨創性を打ち出されたのが、これまで誤解されつづけてきた、カントにおいて我々の行為が道徳的と判定されるのはいかなる原理によつてであるかを明らかにするための、「道徳的判定原理」をめぐる議論に關してあります。この点について新観点を打ち出すことが出来たからこそ、獨創性豊かな、教授の大著『カント批判倫理学』が誕生することが出来たのであります。

今後、川島教授の書がカント倫理学の研究をめざす学徒達にとり最高の手引きとなり、また超えるべき峰となることでありましょう。

岩田淳二（金城学院大学教授）

河野仁昭著

『詩のある日々——京都』

（京都新聞社・発行一九八八年十一月）
B6判・三四七頁 一、五〇〇円）

先ず私は本書のタイトルの佳さに感嘆した。さりげなく見えるが実に含蓄のある暖かいネーミングである。

河野仁昭氏は、日常たずさわっている職場の仕事においてこそプロであるべきだと考える。河野氏は同志社社史資料室長であり、同志社女子大学の講師。しかし私のように詩を書いている者にとっては、あくまでも詩人なのだ。河野氏にしてみても詩の趣味だとい切るには抵抗がある。普通の趣味的なものであり、そして真剣なもののどこの気持はもろん強い。逆に、詩を遊びであるとか無駄であるとかいった区分を暮らしの中に位置付けることによって、かえって詩のかけがえのなさが読み手にしみじみと伝わってくるといつてもいい。だから本書のタイトルが、詩もあるといった並列ではなく、まっすぐに、詩のある日々と明記しである点に私は心打たれたのであった。

本書は「詩への架橋」「詩人たちの肖像」

「詩のある日々」の三部構成になっている。「詩への架橋」は天野忠氏など二四名の現代詩人の、それぞれの詩を描出しながら、非常にわかりやすい解説が為されていて、詩をどう読むかとまどっている人にとって必見のパートである。「詩人たちの肖像」では多くの詩人の生ま身の個性に触れる思いがあり大変興味深い。

「詩のある日々」では「主婦の営みが、愛する者あつての材料の吟味選択であり、料理の工夫なら、わたしにとって詩は、貧しくささやかなわたし自身への愛による営みである」との河野氏の視座が、本書全体に通底していることを知らされて、はっとする。

河野氏は勤め先の大学の歴史編集にたずさわっているとき、膨大な裏付資料に接しながら、ひとつの深い認識に到達する。

「歴史学者にとっては一顧の価値もあるまいと思われるような日常の些細なできごとを、地球上のどんな大事件よりも詩人がしばしば大事に扱い、つよい関心を示すのは、やがて必ず死に、地上から姿を消して

ゆく人間への、いつくしみと哀れみのためだ」

私は、まさに詩のある日々とはこういうことなのだと思われる思いがした。そのほかにも「名づけなかつたらそれきり消滅するであろうようなものが、わたしたちの対象なのだ」という認識があり、河野氏の一人倍の誠実さと謙遜のほどに頭がさがる。明らかに詩を超えて生自体の爽やかさが読後感である。

青木はるみ(詩人)

玉置保巳著

『リプラーの春』

(編集工房ノア・発行一九八八年十月
B6判・三三二頁 二、二〇〇円)

玉置教授が初めてまとめられた紀行・随想集である。前半「リプラーの春」の部の四篇は、一九七〇年四月から一年間、ドイツに留学されたときの体験記。後半をなす「私と妻とロクの話」にまとめた十篇は、帰国後の日常生活を淡彩画のようにえがいたものである。

ジェット旅客機の窓からドイツを眺めたことしかない私には、リプラーは地名ら

しいとは思うが、いったいどの辺りかは見当もつかなかった。「人口数万の小さな町で、ケルン近郊のベッドタウン」だという。その町の古城の中にあるゲーテ協会の教室で、二カ月ほどドイツ語会話を学ぶことから、玉置教授は留学生活をはじめられる。これは賢明な方法である。同行された奥さんも、そこで初級会話を学んだ。留学の目的地はミュンヘンであった。

読みながら身につまされるのは、下宿の問題である。当時は年間一万ドル以上持ち出せなかったから、苦勞して経済的な下宿を探さざるをえなかった。やっと求めたのは、余り豊かでない人たちの素人アパートのようなもので、炊事場は隣室の学生たちと共用だった。その学生たちの部屋には、深夜まで友だちや恋人たちが出入りして騒ぎまわるのである。

奥さんには神経性の心臓疾患という持病があり、隣人にしばしば悩まされるにもかかわらず、玉置夫妻はより快適な下宿へ移ろうとはしていない。当時の留学とか在外研究生活がどのような状況にあったか察せられる。記録としても貴重な。

神経がゆきとどいたきめ細かいたッチで描き出されるのは、意外にも、主としてそうしたアパートなどで接した、地位にも財産にも恵まれていない人たちだ。飾りも気取りもない、生地のままの人間を描く筆は、そのまま玉置教授夫妻の描写にも及んでいて、知的庶民とでもいふべき夫妻の喜怒哀楽や戸惑いが、ときに哀れであり、ときに滑稽でさえある。

身辺の静謐を乱されることに対してきわめて要心ぶかい夫妻も、滞在費が潤沢でない異境では、鍵をかける住居文化を満喫するわけにはいかなかったらしい。

夫妻にとつては、夫人のお伽噺をも理解する愛犬ロクと三人?の生活圈にあるときが、最も幸福なときであるようだ。座るべき所に座っているという心のバランスが、しみじみ感じられる。

玉置教授はドイツ文学者である以前に、詩人である。その眼、その感性がゆきわたっているところに、『リプラーの春』の特色があるといつてよさそうに思われる。

河野仁昭(本部社史資料室長)

金田民夫著

『美学者の旅日記』

——世界ひとり歩き——

(金田民夫・発行一九八八年五月)
A5判・三六〇頁 私家版

「ふらんすへ行きたいと思へども／ふらんすはあまりに遠し」と詩人が嘆いたのは昔の話で、今ではたとえバリなら直行すれば十時間たらずで到着する時代になってしまった。人々は行きたいと思う異国の土地であれ、最短コースを時間に無駄なく飛ばす。旅行機関の発達もたらした今日の海外旅行の習慣を誰も疑わない。しかし海彼への旅が現在のように簡便になったために、われわれが失ったものも大きいのではないだろうか。

金田民夫先生の『美学者の旅日記』——世界ひとり歩き——(私版)を読んで、私はそのことを痛感せずにはいられなかった。この本は金田先生が一九六四年に約八ヶ月にわたって、東洋・中近東・東欧をのぞくヨーロッパ各国・アメリカと、だから地球を一周された旅行の克明な日記である。私は金田先生が世界のどのような町を

どのような順序で歩かれたか、そのすべてをここに書き写したい誘惑にかられるが(なぜならその旅程自体おのずと一つの精神的・芸術史的な構図をもの語っているから)、このときの金田先生の旅が空間的にも時間的にもたつぷりと豊かな、その意味で今はいよいよ滅多に見られない稀有な旅であることに感嘆した。

金田先生は、ただ美術館や遺跡を訪ね美学者や美術史家と会い学会に出席されたのではなかった。なるほど思想的著作や美術作品は、われわれの平凡な日常生活を超越したところに存在している。しかし美術や思想を支えているものがその国の名もなき人々の日常であることも事実である。金田先生は世界の各地で、それまで研究書や図版で熟知していられる作品の実物と共に、その作品をもつ国々の人間を、ゆっくりと時間をかけて観察しその生活を(旅人として)経験して来られた。

美術や思想の傑作や名品とされているものが、それを生み出した国々の人間や自然の中で、今どのような姿を示しているか、それに対する金田先生の見識・批評・趣味

がこの日記には遠慮なく書かれていて、その自由でのびやかで生彩を放つ記述は、客観的に書かれた美術史や思想史なんかより私には余程面白かった。

金田先生はこの本の(まへがき)で「私には日頃、日記を付ける習慣がない」と言っておられるが、一九六四年の四月十八日から十二月十九日まで一日の休みもなく書き続けられたこの日記は、金田先生の世界ひとり歩きが一日たりとも空白のない充実した旅であったことを表わしている。発表の意図もなく私的に書かれた文章であるが、自分に対しても他人に対しても率直な金田さんの飾らない人柄が全篇に溢れていて、読者は喜怒哀楽を共にしながら一人の美学者の稀有な旅に随行することになる。読みだすと止められない。この本が文学作品としての魅力を備えていると思うのは私一人ではないだろう。

源 高根(大阪芸術大学教授・

大学文学部嘱託講師)

笠井昌昭著

『コネテイカットの四季——ス
ケッチ絵はがき便り、ニュー
イングランドから』

ワコール／企画デザイン事業部・発行
一九八八年十二月
A5判・一七六頁 一、八〇〇円

文学部の同僚笠井教授が、アメリカはコ
ネテイカット州のウエスリアン大学の客員
として渡米したのは、一九八六年の四月で
あった。

間もなくロサンゼルスに立寄った氏から
封書の第一便が私の手元に舞いこんだ。数
枚の薄い便箋に細字でぎっしり、ロサンゼ
ルスの出来事が細かくしたためられてい
た。ロサンゼルス・カウンティ・ミュージ
アムや、ポール・ゲッティ・ミュージアム
などの訪問記が中心になっていて、実に面
白い。大忙しの旅程の筈なのに、切符売場
の風俗からインフォメーション嫌との会
話なども交え、臨場感あふれる描写ぶりだ
ある。もちろん展示品についての観察記録
も克明につづられており、おまけにスケッ
チ、それも精緻な細密画が添えられてい

る。この手紙を活字に直すと四〇〇字詰原
稿用紙で20枚の一寸したエッセイになり、
早速『博物館学年報』18号にそのまま掲載
されることになった。

コネテイカットに落ち着いた氏からは、
美しい絵だよりが知人の手元につきつぎに
届くようになった。私の手元にも届いたが、
よくみると手造りの用箋で、おまけにナン
バーまで入っている。こうして一年間の外
遊をおえて氏が帰国した時には、絵はがき
の総数は二一五点に及んでいた。四季おり
おりの風景、殊に秋の樹木の色どりや夕焼
の空模様鮮明で、透明なアメリカの大気
までが感ぜられる。このままで各自が私有
しているのもつたいないということにな
って、一九八七年の十一月啓明館一階の博
物館課程の資料展示室で七四点を展示し
た。これが思わぬ反響をよんで、一週間ほ
かりの間に千人をこえる参観者があった。
ワコールの西村常務はたまたま来校のつ
いでにご覧になった一人だが、西村さんは
美校出身の画家の目で「プロではかけない
美しさ」に魅せられ、深く感動された。こ
れがこの書が世に出るきっかけとなった。

ロサンゼルス美術館にはじまる本書の
魅力は、手造り絵はがきの美しさと達意な
文章の中味にあるのは勿論だが、加えて文
章自体の面白さが人をひきつける。往時の
文学青年笠井昌昭の面目躍如たるものがあ
る。

高価な絵具の味を出す為に、原色印刷に
は一入の苦心があったというだけに、眺め
て読んで楽しむのつきない好著である。

小川光暘（大学文学部教授）

高木保興著

『開発途上国の経済分析』

（東洋経済新報社・発行一九八八年六月）
A5判・一七六頁 三、三〇〇円

「南北格差」―開発途上国と先進国の間に
横たわる生活水準の格差―が言われて久し
い。さらに、七〇年代から八〇年代にかけ
て、その格差は拡大し、事態は深刻化して
きている。このような状況を踏まえて、本
書は開発途上国が抱えている経済問題を浮
き彫りにし、経済発展に必要な政策提言が
述べられている。

開発途上国にはかなり共通した経済問題
があるが、まず第一に、以前から指摘され

ている問題は「二重構造論」(第三・四章)である。二重構造自体にも様々な内容を含んでいるが、その中でも、農村地帯での低賃金・余剰労働、都市における高賃金・高失業率の長期におよぶ併存状態である。その原因についての諸説が要領よくまとめられている。

第二の問題は、石油危機以後にクローズアップされてきた「累積債務」(第五章)である。著者が指摘している興味ある点は、開発途上国の中でも所得水準が比較的高い国では、経済発展の過程で累積債務が一時的に増加することもあり得るが、低い国では債務返済の負担が増加し続け、結局、返済不履行の状態に追い込まれていくことである。

第三の問題は、多くの開発途上国の特徴であるが、少数の一次産品だけを生産および輸出している経済環境、すなわち「モノカルチャー経済」(第六・七章)に係わっている。一次産品は国際商品市況の変動に晒され、また、商品投機の対象にもなりやすい。したがって、一次産品で外貨を稼ぎ、工業資本財を購入する貿易パターンを

維持するのが困難になってくる。さらに、七〇年代に経験した世界的不況と石油価格の上昇は、非産油国に累積債務の増大とインフレ率の昂進を助長する機会を与えてしまった。そして、インフレ率の上昇は貿易収支を悪化させ、マイナスの経済成長率をもたらし、先進国からの開発援助の削減を余儀なくされる。すると、政府の財政赤字も大きくなり、その調達手段に貨幣の増発が行なわれると、一段とインフレを加速させる悪循環に陥ることになる。

このように著者は開発途上国が抱える問題を明らかにしながら、総じて「南北問題」を解消する方策は各国の自立自助が必要で、特に、国内の貯蓄率を引き上げることが不可欠な条件であると指摘している。そして、先進国からの経済援助はあくまでも補助的役割に過ぎないことが強調されている。いま、アジアの経済が注目されている時代に、開発途上国の本質的な問題を冷静に見据え、アジアの一員として日本が経済援助などで果たすべき役割を示唆してくれる格好の書物である。

西村 理(大学経済学部教授)

川越 修著

『ベルリン王都の近代』

(ミネルヴァ書房・発行一九八八年八月)
A5判・二五一頁 三、五〇〇円)

今日の日本におけるヨーロッパ史研究は、欧米の研究者たちの研究書をアレンジする域を越え、原史料にもとづいて、日本独自の問題意識によって研究されるようになった。本書もこのような水準を示す一典型である。こうした研究は、不可避的に時代・地域・対象を限定してかからざるをえない。本書も一八四八年革命期におけるプロイセンの王都ベルリンの下層民衆という焦点をしぼり切った研究となっている。だが、このように焦点をしぼり切っているからといって、本書を狭く限定されたテーマについて詳細な事実を提示するだけの瑣末な実証主義の所産と思ってはならない。それというのも、著者が内外の研究動向をふまえたうえで、の壮大な問題意識に立脚しているからである。では、その問題意識とはなにか。

第一は、近代イギリスを基準にした、後進国ドイツという在来のイメージを排し、

ドイツ近代社会形成の独自の論理を探ろうとしてゐることである。このことは、ドイツ近代史像にとどまらず日本近代史像の再検討にも波及する重要な論点である。その際に著者は、ベルリンという都市生活空間における民衆諸層の相互関係を解説するという社会史的方法を駆使している。第二は、今日の社会史研究が、ややもすれば民衆生活の日常性のなかに没入しがちであるのに対して、本書は、政治の中心に王都ベルリンを舞台に選定して三月革命という政治的事件史とリンクしているばかりでなく、この革命を通じて都市民衆の日常生活と国家とのかわりの変化を、民衆の健康と病気をめぐる諸問題を素材に検討しているのである。

総じて本書は、民衆社会史研究から出発して、近代社会の形成メカニズムの解明へと進む、「社会史研究の可能性を探る一つの実験」(「はじめに」より)である。この実験は、かなりの確度で成功していると思われる。それというのも著者は、本書の末尾で「一八四八年のベルリンは、……『挫折したブルジョア革命』劇の舞台ではない。

われわれは(そこから)ドイツにおける近代社会形成への聲音をこそ聞きとらねばならない。」と述べているが、この言葉が、相当の迫真性をもって読む者の胸に迫ってくるからである。

ところで、いうまでもなく学問研究はすべて中間総括である。著者にとつて残された研究課題はなにか、それにむけての研究の展望はいかに、川越氏の第二作への抱負を開きたい。

望田幸男(大学文学部教授)

中村 弘著

『貿易業務論』(第四版)

(東洋経済新報社・発行一九八八年四月)
(A5判・二二三頁 二、三〇〇円)

本書は、わが国で実際に行なわれている貿易取引の概要をできるだけわかりやすく、かつ網羅的・体系的に解説されたものである。わが国の経済発展は貿易に負うところ極めて大きいが、近年貿易収支の大幅な赤字により、諸外国との貿易摩擦が問題化していることは周知の事柄である。貿易摩擦に対するわが国の対応の仕方について「通商白書」(一九八八年版)は、世界経済

におけるその地位と役割を十分に自覚しつつ、①構造調整の推進、②内需中心の持続的成長、③一層の市場アクセスの改善、④製品輸入の促進、等の経済政策のほか、人、文化等の様々な分野での幅広い交流を拡充し、各国との相互理解を促進する等多様な施策を総合的に講じていくことが必要であるとしている。

本書はその重要な貿易取引の実際が大変理解しやすく解説されており、第四版を数える。そこで、大幅に改訂された部分を中心にその構成を見ると、次のようになっている。第一章「わが国の貿易の現状と課題」と第二章「貿易業者の業態」では、統計数字および内容が最新のものに改められている。第三章「マーケティングと市場調査」では、一八八五年のアメリカ・マーケティング協会のマーケティング定義「個人および組織の目的を満足させる交換を創造するために、アイデア、財およびサービスの概念形成、価格、プロモーション、流通を計画し実行する過程」(一八頁)が採用され、内容の一部が書き改められている。第四章「オファと承諾」、第五章「定型的

取引条件」、第六章「貿易取引の契約書」、第七章は表題が「外国為替・貿易の管理と輸出承認」、から「外国為替・貿易の管理とその方式」、に改められ、コム違反輸出事件を契機に一部改正され、新「外国為替及び外国貿易管理法」(一九八七年十一月より施行)に従って内容が書き改められている。第八章はわが国の輸出保険制度が輸出依存型から国際協調型に衣替えし、その大改正(一九八七年四月)で輸出保険から貿易保険に改称された。それに伴って、表題が「海上保険と輸出保険」から「海上保険と貿易保険」に改められている。そして、新規に加えられた前払輸入保険と仲介貿易保険についても解説されている。前世紀の遺物といわれている従来の海上保険証券は、UNCTADの批判を受けて歴史的改訂が行なわれ、一九八二年から実施されるに至った。しかし新フォームへの移行は一気に行なわれることなく、旧約款が依然として利用されているのが現状である。新約款については、巻末に付録として加えられている。第九章「海上運送と航空運送」では、統計数字が最新のものに入れ替えら

れ、それに合わせて「外航海運と国際航空貨物運送の現状」が書き改められている。第十章「通関と関税」では、一九八八年一月から施行された「商品の名称および分類についての統一システム」に従って、輸出・輸入申告書類が書き改められたほか、ガット新ラウンド(ウルグアイ・ラウンド)についても解説されている。第十一章「外国為替と荷為替手形」、第十二章「信用状と輸出入荷為替」、第十三章「貿易金融」、第十四章「貿易クレームと対策」、第十五章「滅失・損傷貨物の求償」。

本書が初版刊行後十五年という長年月を経過して今なお健在なのは、とりわけ実務家の需要に合致している上に、実務経験のない学生諸君にとっても最新の情報を提供してくれる好著だからであろう。これは実務経験の豊富な著者の手によるものであることはもちろんのこと、増刷のたびに著者が労を惜しまず最新の統計数字や内容に書き改めていることにもよるものだろう。なお、本書は著者が担当する商学部の講義「貿易業務論」のテキストを意図して書かれたとのことであるが、関係分野の方々に

広くお奨めしたい。

三好義之助(大学商学部教授)

藤原秀夫著

『マクロ経済分析における

貨幣と証券』

(千倉書房・発行一九八八年九月)
(A5判・二八二頁 三、八〇〇円)

本書は「マクロ経済モデルを、各経済主体の予算制約式とそれから導出された経済全体の予算制約式を制約として、整合的に再構成する」ことを目的とした理論分析の書であり、これによって「証券市場の性格を明らかにすると共に、貨幣経済分析におけるより一般的な理論を展開」することを意図している。

七〇年代以降、貨幣・金融分野に限ってみても、国債の累積、金融革新の展開、金融国際化・基軸通貨国米国の債務国への転落等緊急に対応すべき課題は枚挙にいとまがない程であった。財政赤字ひいてはファイナンス問題を扱いうる整合的なマクロ・モデルの構築、国債累積問題を把握するための理論的前提の解明、オープン・マクロモデルにおける証券投資の取扱い・変動相

場制における為替レート決定理論の一般的なモデルの吟味等々、本書のマクロ理論の分析によって検討されなくてはならない問題群であった。

著者はこれらの問題の分析視点について次のように述べている。ファイナンスの問題はクラウディング・アウトや、経済主体の行動関数に対する資産効果の問題を含み、ファイナンスの方法が経済システムの安定性・マクロ的政策効果に影響するため、貨幣市場のみならず証券市場の分析とその特定化が検討されねばならない。また国債の累積についてはそれが「経済システムの均衡成長径路の安定性」ひいては「経済主体の証券に対する行動様式」にかかわっており、モデルに含まれる各市場の行動様式がまず明確に把握されていなくてはならない。そしてオープン・マクロ経済学の構成については貨幣市場を含む諸市場の性質及び相互関係が統一的に把握されていなくてはならないという。

このような理論的課題と分析視角の下で、基本的には生産物・貨幣・証券の諸市場からなるモデルを中心に、各主体にお

る予算制約式を制約とし、定差方程式による期間分析、微分方程式による動学的性質の分析が行はれた。IS-LMモデル、期末モデル、期首モデルの性質も検討されているが、マクロ理論の現状をふまえて本書の中で著者が分析し強調した諸点は次のようである。期末均衡モデル及びこれに生産物市場を加えた不均衡モデルにおいて「予算制約式を制約として整合的なモデルが構成される」こと。これらのモデルの中では少くとも生産物・貨幣・証券の三市場を取り上げなければ理論的に不十分であること。そして不均衡モデルにおける所得の事前・事後概念の区別、ファイナンス概念の位置づけ、ワルラス法則の重要性の認識が必要であるということ等々であった。

本書は最近の貨幣経済理論の重要かつ困難な諸問題に挑戦した力作であり、多くの数式や広範な理論上の論争点・抽象的な議論が含まれており通読は容易ではないが、分析の視点は現実性を踏まえた問題意識の下に設定されている。読者は本書の意図をあらかじめ把握するため、かなり詳細な序文を熟読された上、本文に進まれるのがよ

いであろう。

横山卓雄著

栗栖弘典（大学商学部教授）

『平安遷都と「鴨川つけかえ」

——歴史と自然の接点——』

（法政出版・発行一九八八年六月）
（B6判・二三五頁 一、八〇〇円）

注意深い読者なら、私と家内の名が各一回ずつ書中に出てくることに気付くであろう。二人とも僅かだが本書の成立に関係した。

インサイダー取引きなし

しかし正直言って私は本書を読もうともしなかった。興味がなかったからだ。鴨川つけかえ説も知らなかったし、鴨川と加茂川の区別もどうでもよかった。既に本書に対し、京都・読売・朝日は各紙が詳しく紹介していたが、別に気にも止めなかった。ようやく最近ふと読み始め、一気に読んでしまった。

鴨川つけかえ説は面白い！

まさに傍観者の私は、読後の今でもこの説の当否について、基本的にまったく痛痒を感じない。ただ著者の引用に従い最初に

提唱された塚本説を知った時、なんと素晴らしい説かといささか感動してしまった。適確に事実をとらえ、自由かつ論理的に議論する。まさに科学論文の手本なのだ。しかし読み進むうち、定説とはかく創られるというように、派生するイメージの増大の一方で、論拠する事実の伴わない成行行きに、不安を感じさせられた。

鴨川つげかえ説の論破はもっと面白い

本論である。つげかえ説に対し縦横に反論が展開される。議論の基礎データは具体的、それらを継ぎ合わせる論理は手堅く、よくこなれている。予備知識が欲しいと思うと、すぐそばにちゃんと書いてあるのだ。実に読みやすい。したがって、生き生きとした実感が伝わってくる。とにかく面白い。一度読んでみて下さい。このわかりやすさの秘密は、講義の中で徹底的に練られた御陰であろう。これら綿密な議論の内に、著者の自然史の一般への普及に対する、並々ならぬ情熱を感じずにはおれない。ただ惜しいのは次の第二章だ。

自然史の多重性と複雑さ

生き生きとした第一章に比較すると、二

章は重く実感に乏しい。自然史に対する著者の読者への伝達は、残念ながら失敗である。あまりにも多重な自然史をすんなり受入れる礎地は、まだ一般にまったく育っていないのだ。読者からすれば、急に抽象度を増す専門用語の藪の中で、取り残されるたえるばかりである。しかし我々は、著者の専門分野の一端がここに紹介されていることを銘記すべきである。自然史学や地質学は決して閑学ではない。その証拠こそ本書なのだ。恐ろしく多重な自然史に対する著者の次なる挑戦を期待したい。

平安遷都一二〇〇年前に、鴨川つげかえ説とその否定説を、その論拠と論理を過不足なく論じた本書の価値は高い。特筆すべきことは、一部の専門家だけの間にはなく、広く一般に議論の所在を共有せしめたことにある。両説に対して言及する時、今後本書を抜きにしてはもはや何人も論じられまい。

植原 徹(東京都フィッシュン・トラック社長)

同志社談叢

第九号

論文

新島襄の大学設立運動(一)……河野仁昭
明治初期岩手県の同志社人に
関する新資料……高橋光夫

高橋元一郎ノート……室田保夫
—詩・社会事業・平和そして祈り—

徳富蘆花と「今治英学校」……竹本千方吉

資料

同志社職員異動表……

—明治二十五〜二十七年—

新島襄に関する文献ノート

(その七)……

河野仁昭

—著者・筆者別—

(頒価一、〇〇〇円)

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五)―二五―三〇三七・八